

燃える風

yūko tsushima

津島佑子



中公文庫

中公文庫 ©1985
燃える風

昭和六十年七月十日初版
昭和六十年九月二十五日再版
著者 津島佑子

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201234-1

定価 三二〇円

中公文庫

燃える風

津島佑子著



中央公論社

表紙・扉 白井晟一

目次

燃える風

5

傷

大庭みな子

201

燃える風

1

窓際の席なので、石田有子^{ありこ}は日光を浴びすぎていた。手帳から顔をあげ、むず痒い頭を両手で掻きはじめた。担任の教師の声が、教室の暗い部分に響いていた。

誰かが、窓をあけてくれれば。……

今度は背中に右手を差し入れて、痒い箇所を探った。ゆうべから冷たい風が吹き続けているのに、教室のなかは暑かった。ゆうべは一晩中、窓が鳴り、隣りの家の黒い犬が吠え、一彦は泣きだした。その一彦を階下の便所に追いたてていく叔母の、寝呆けた、苛立った声が、母親の横に寝ている有子の耳にも聞えた。目をちゃんとあけてないと、おっこちるよ。ほら、目をあけて。なに泣いてんの。もう泣くことなんかないじゃないの。おまえのお母さんはここにいるんだから。有子は自分の寝ている四畳半の部屋に、外からなにかが頻りに入りたがっている夢を見た。入りたくてしかたがないのに、決してなかに入ることはいできない。

教室の窓は朝から一度も開けられていなかった。ガラスの汚れた部分が白く煙って浮き上がっていた。終業時間を知らせるチャイムが、もうすぐ鳴るはずだった。静かな教室のあちこちで、生徒たちが心地良さそうにうたた寝をしている。明日の昼休みに、石田有子にどこか人のいない場所に連れて行かれることになっている野尻由美子も、だらしなく机にうつ伏せになり眠っていた。

有子は机に両肘を突いて、再び手帳に眼を戻した。前の席の背中が微かに揺れている。

野尻由美子を、誰にも見つからない場所で、二度と有子に気安く近づくことができなくなるように、少しの妥協もなく痛めつけてやらなければならない。有子の方が体が小さいので、どうしても作戦が必要だった。が、それはさほどむずかしいことではない。相手は頭が悪く、気も弱いのだが、有子に対してだけ、強気になる。その有子から突然、一人きり、妙な場所に呼び出されれば、それだけで、たぶん、野尻由美子は怯えきってしまうに違いない。有子はそれに少しだけ手を加えてやればよい。少しだけ。

一時間前の昼休みに、有子はそう思い決めたのだった。

授業がはじまってから、有子は早速、場所を検討しはじめた。誰にも見つからず、人の助けを呼ぶこともできない場所。そこに立っているだけで、いやな気持ちになってしまう場所。

地下の倉庫は、有子自身怖ろしくて、近づきたくなかった。同じ地下でも映写室なら明るい螢

光灯がある。が、そこはいつも鍵が閉まっている。鍵は職員室にあったが、それを盗むようなことはしたくなかった。三階の理科準備室は古い剝製や標本がたくさんあるので、生徒たちからは嫌われているが、理科主任の原田先生が始終、出入りしている。屋上も、人眼につきすぎる感じがする。庭といえば、調理室の裏にも小さな庭があった。子どもたちの出入りは禁じられている。そこには、今、シオンがいっぱい咲いている。夏には、ダリアとカンナだった。調理のおばさんたちの庭なのだ。理科室で飼っていた文鳥のオスが死んだ時に、有子が頼みこんで、カンナの根もとに埋めさせてもらったことがあった。

有子は手帳に書きこんだ場所の名を、次々に大きなバツ印で消しはじめた。考え続けるのが、面倒臭くなってしまった。野尻由美子の言葉など、聞き流してやってもかまわないのだった。

終業のチャイムが鳴りだした。机にうつ伏せになっていた野尻由美子が勢いよく体を起こし、黒板の方に怯えたような愛想笑いを向けた。いつもの、大人向けの顔だった。

廊下に出て、体の熱を冷まそう、と有子は思った。五分間だけの休み時間だった。

放課後、その日はクラブ活動の日だったので、授業が終るとすぐに、理科部に籍を置いている有子は理科室に行かなければならなかった。が、有子はランドセルを背負ったまま、階段を急いで駆けおり、二階の廊下を走り抜けて、北向きのベランダに出た。

二階は、三年生と四年生の陣地だった。三階に移ってしまった上級生たちは、特別な用事が無い限り、ほとんどその廊下を歩くことも、まして、わざわざベランダに出向くことはなくなる。長い廊下の両端にある図書室と美術室、階段によって区切られているその二部屋だけが、全学年の共有地だった。有子も五年生になってからというものの、まだ一度も、去年まではあれほどなじんでいたベランダに行ったことがなかった。ベランダを利用するのが三年生と四年生の特権なら、五年生の特権は、三階から直接出入りできる小屋上、つまり校舎から突き出た形の講堂の屋上を占有することだった。校舎と小屋上の間には渡り廊下と卓球室があり、そこも下級生には近づくことが許されていなかった。下級生は下級生の陣地を大事に守る。四年生と五年生の仲は、学校中でいちばん悪かった。それで有子も、二階の廊下は全速力で、誰にも見咎められないように駆け抜けなければならなかったし、ベランダに出るにも、できるだけ素早く、鉄扉の向こう側に姿を消さなければならなかった。

ベランダに飛び出ると、風は予想以上に強く、有子の体を攻めてきた。風は長いベランダを吹き抜けながら、甲高い音を響かせていた。冬になると人間が寄りつかなくなるのをよいことに、北風がそこに巣を作り、めまぐるしく子どもを産みだしては、外界に送りだしているようだった。ここだったら、と有子は鉄扉にもたれかかり、カーディガンで口もとを抑えながら、頷いた。相変わらず、なにもない殺風景な場所だった。その上に寝そべることもできる、幅の広い、頑

丈なコンクリートの手摺。古い校舎なので、昔の西洋の牢獄に閉じこめられてしまったような気分させられる。ペランダの長さだけが、有子の憶えていた感じと少し違っていた。三年生になったばかりの頃は、端から端まで、百メートルもあるように見えた。奥に行きすぎると、二度と戻ってすることができないような気がして、はじめは鉄扉の前から離れることもできなかった。しかし、やがてそこが歌の練習や馬跳び、鎖踏みなどに都合な場所だと、同じ学年の子どもたちにも分かりはじめ、有子もそのペランダに親しむようになった。

そこが子どもたちで賑わうのは、暖かな季節だけだった。北向きのペランダは、風が少しでも涼しくなりはじめると、急速に近づきがたい場所になった。子どもたちはペランダに背を向け、日当たりの良い校庭に下りて行った。

雪の時だけが例外だった。校庭や屋上から雪が消え果てても、一日中、日の射さないペランダには、いつまでも凍りついた雪が残っていた。それを楽しみに、男の子たちがペランダに押しかけた。氷の雪合戦は、一瞬も気を許すことのできない危険な遊びだった。有子も女ではあるけれど、強引に一度だけ参加させてもらったことがあったが、すぐに頬を切ってしまい、出血がひどくて、血まみれの顔で救護室に駆けつけなければならなかった。その時の傷あとは、今でも、はっきりと残っている。

ここに決めてしまおう。

有子は冷たい手摺に両手を置き、はずみをつけて跳び上がり、体を乗せてまわりを見渡した。庭の広い一軒の家と、その左側に、三階建ての病院がある。何度も見たことのある眺めだった。目新しいものはない。病院は伝染病が専門のところで、子どもである自分たちがそのなかに入っているといけないと教師たちに言われていたのは、細菌の伝染を怖れていたことだということも知っていたし、その裏の家が病院長の私宅で、一人きりの孫が同じ学校の四年にいるということも、有子は聞き知っていた。

今、その家では、和服を着た老人がガラス戸の内側に寝そべって、新聞を読みふけている。西陽が、縁側の一部に射しこんでいた。病院の窓辺には、タオルや下着が干され、鉢植えの花も置いてある。部屋のなかの様子まで見届けることのできる窓は少なかった。三階の窓のひとつに、赤いガウンを着た女の姿が見えた。髪の毛が長く、まだ若い女のようにだった。病室のなかに誰かがいるらしく、後を振り向いては顔と手をさかんに動かしている。その窓は、有子のところからは、声まで聞えてくるような近さだった。有子は、病院の屋上に眼を上げた。白い割烹着を着た女の人が一人、白い洗濯物を、強い風に身を屈めながら次々に取りこんでいた。

——よし。

有子は眩き、手摺から跳び下りた。もう一度ベランダを見渡してから、急いで校舎のなかに戻った。

三階の理科室では、すでに、部員たちの研究発表会がはじまっていた。十二月の展覧会に各班ごとに出品するものの説明で、その日は、六年生の男子二人が、教壇で自分たちの研究を説明していた。黒板に大きく、風と温度との関係、と書いてあった。

有子は同じクラスの小川正子の姿を探し、その横に坐りこんだ。窓際に立っていた顧問の原田先生が有子を認め、無表情に頷いた。

——遅かったね、どこに行ってたの？

小川正子が有子に身を寄せ、囁き声で尋ねた。

——探したのよ。

——どうして？

——あたしひとりじゃ、いやなんだもん。

——……しゃべっていると、怒られるわよ。

小川正子はしぶしぶ、正面に向き直った。有子のクラスで委員長を務めている、男子よりも成績が良く、その上、絵も歌も得意な女の子だった。眼の大きな、愛敬のある顔で、小川正子を嫌う人はいそうになかった。

学年のはじめに、有子は小川正子を、それまでは男子しかいなかった理科部に誘いこんだ。ど

こかひとつのクラブに所属しなければならぬのなら、せめて、女子のいないところにしたいと思った。しかし、男子のなかに一人だけ、ということも避けたかった。小川正子と一緒になら、理科部に入ることに決めたのは小川正子の方で、有子はそのおまけと見なされるはずだった。それに、負けん気の強い小川正子なら、必ず、有子の誘いを受け入れるはずだった。成績の良い男子たちが独占している理科部に、はじめて挑む女子が自分なのだ、と思うことが、小川正子にとって魅力的なことではないはずはなかった。

案の定、小川正子は有子の誘いに乗り、それをきっかけに、二人は「友だち」ということにもなってしまった。有子はこの「友だち」を大切に扱った。悪い友だちでないのは、確かだった。目立つ生徒のそばにいと、こんなにも人の眼から隠れやすいものか、と有子はい小川正子と行動を共にするようになってから驚かされた。

有子は熱心に教壇の六年生を見つめ続けた。

ペランダに立つ野尻由美子の姿が、時々教壇に浮かび上がっては消える。そのたびに有子は、全身に痛みを覚えた。口を開け、胸から息を吐きださずにはいられなかった。汗ばんだ掌をスカートにこすりつけ、自分の荒い息が隣りの小川正子の注意を引かないよう、有子は歯を食いしばり、全身を硬くした。

その日は、六年生の男子たちの二つの発表だけで、クラブは終わった。原田先生が最後に、一週

間後の部分月食の日付を告げ、せっかくの機会だから理科部としては、特別に学校の望遠鏡を使って観測したいと思っているので、遠い者は無理だが、家が近い者はできるだけ参加するように、また、帰りは深夜になってしまいうから、今からちゃんと家の人に話しておくように、と言った。この言葉に、部員たちは歓声をあげ、騒ぎだした。小川正子が、どうする、あたしたちは、と有子に問いかけてきた。有子は答えなかった。

有子と小川正子が立ち上がって帰り支度をはじめると、原田先生が近寄ってきて、声を掛けた。——君たちは無理することないぞ。もし参加するようなら、君たちと家が近い男子に送らせるけど。……

小川正子が有子を振り向いた。有子は咄嗟に答えた。

——行きます。

小川正子も頷いた。

——そうか、だけど、家の人が承知しなければだめだぞ。

——はい。

二人は声を揃えて、答えた。

——それと……研究発表はなににするか決まっているのか。

有子と小川正子は顔を見合わせた。まだ、なにも相談していなかったが、有子はその場で思い